

## 天敵のいない世の中は？

自然界には食物連鎖があり、食う—食われるの関係があることを学んだ。そこでもっと大きな動物の狩りの様子を見せた。トラがシカを捕らえて、内蔵を食べる映像である。子どもたちはじっと映像に見入っていた。シカは哀れトラの餌になってしまう。大きな動物の世界でも、食う—食われるの関係があることを押さえてから

天敵のいない世の中は、ダンゴムシやシカにとって幸せな世の中だろうか？

と尋ねた。多くの子が〈天敵がいなければ幸せ〉と考えた。

〈幸せ〉 25人

- ・天敵がいると食べられて死んでしまうから。
- ・天敵がいない方が死ななくてすむし、自由に動けるから。
- ・食べられないから
- ・トラがいるとシカはトラに食べられて全滅してしまうから

〈幸せじゃない〉 2人

- ・ダンゴムシもシカも食べられたりしないと退屈してしまう。
- ・もし天敵がいないと、シカもダンゴムシもどんどん増えてしまう。
- ・トラやヘビ、カエルなど他の動物がいないと寂しい。
- ・天敵がいないとバランスが取れなくなる。

このように両方の考えが出された。中には幸せかどうか決めかねている子もいた。

「天敵がいない世の中は？」(体験活動)をしてみよう。

子どもたちとシカ役、草役にわけて、食料・水・草を表すジャンケンをした。あいこだったら草

はシカになり、シカは増える。食べ物にありつけなかったシカ役は土に帰り草役となる。これを10回(10世代)繰り返し、シカの数を記録していく。

次は草役の中にこっそりトラ役を潜ませておく。シカが草だと思って食べようとする、トラに襲われてしまう、というわけである。これも10世代繰り返し、記録を取った。

これをグラフ化してみると次のようになった。1回だけの体験活動では傾向がつかみにくいので、各5回の結果も合わせて見た。

グラフを見て気がつくことは何ですか？

- ・天敵がいない方は、増えたり減ったりしている。
- ・トラがいる方は割と平ら。

天敵のいない世の中は、ダンゴムシやシカにとって幸せな世の中だろうか？

〈幸せじゃない〉 2人→24人

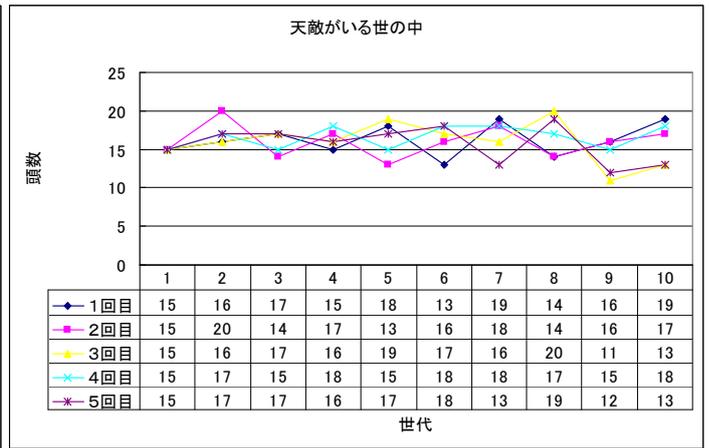
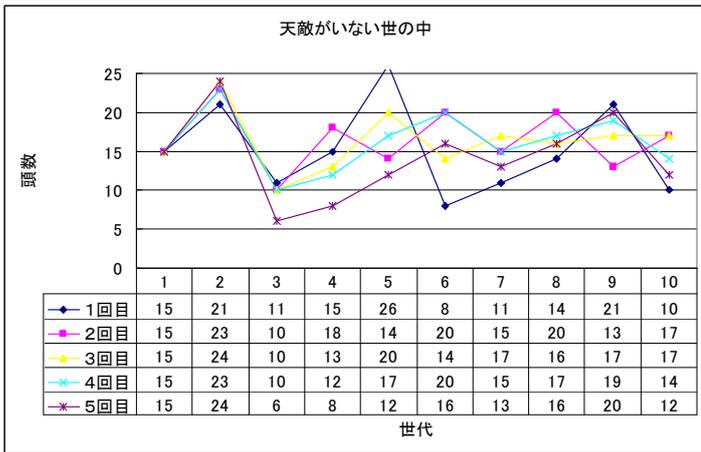
- ・シカが増えすぎて食べることができない。
- ・シカと草の数が違うと餌を食べられるときと食べられないときがあって、生きにくいと思う。
- ・天敵がいないとシカが増えすぎたりするから。天敵がいると普通に食べることができる。
- ・食べ物がなくなって最後には自分たちが全滅してしまう。

現在シカの天敵が減り、人の世界にも様々な被害が出ていることを話した。

天敵がいない世の中はダンゴムシやシカにとって幸せな世の中だろうか？  
 (幸せ、平せじおほい)  
 ちげ  
 ち、ほし、天敵がいない方がゆくりできる  
 (幸せ、幸せじおほい)  
 ちげ  
 天敵がいるとゆくりしている子もまが  
 ないからと天敵がいなければ食べ  
 られてしまう(自分か)。  
 けれど、天敵がいないとバランスが  
 ちるぞうだから、もしいすま、いれ方が  
 いいからむしろいい。  
 (ほんか、いるいるほ動物がつかまえていさう  
 じか、自分か食べ物もたまるから。)

体験活動「天敵がない世の中は？」

1. 学級を二つに分けて向かい合わせになる。一つは資源役、もう一つがシカ役。
2. 教師の合図で、出会った相手とサインを出し（グー「水」チョキ「家」水「パー」食料）もし同じサインだったら、資源役はシカに連れて行かれる。
3. 連れて行かれた資源役は、次世代（2回目）に生まれた子としてシカ役になる。シカが増えると、資源役に出会えないことがある。その際、シカは死に土に返る（資源役になる）
4. これを10回（10世代）繰り返す。各回とも人数を記録していく。
5. 次に、資源役の中に、こっそり天敵のトラ役をを1～2名入れる。トラは教師が選ぶ。
6. 2～4をおこなう。この時シカがトラを選んだら、シカはトラに食べられて資源になる。
7. これを10回（10世代）繰り返す。各回とも人数を記録していく。
8. 天敵がないときといるときの人数をグラフ化して比べる。
9. 天敵がいる方が、シカの数が増えたり減ったりして推移し、天敵がないと増減が激しい。つまり、天敵がいる方が世の中は安定することがわかる。



※天敵（トラ）がいる場合といない場合について、思考実験をそれぞれ5回実施してグラフ化

食物連さ

カエル → ハビ → ダンゴムシ → しめ水菜

トラ → シカ → 草

天敵がない世の中は、ダンゴムシやシカにとって「幸せな世の中だろうか？」

〈幸せ〉

- やられない
- 食べられない
- 食べるのに困らない

〈幸せではない〉

- 仲間がいなくて寂しい
- バランスがとれない
- どんどん増えちゃう
- たいてい
- 死なない
- 増えすぎて食べられない
- 差が大きいと生きにくい

増えたりへたり わりとたたり

ブタがいた教室 ～命について考える～

「ブタがいた教室」という映画がある。学級でブタを育てるというストーリーである。実はこの映画にはもとになった実話があり「ブタのPちゃんと32人の小学生（ミネルヴァ書房）」という本に詳しくまとめられている。平成2年～4年にかけて、大阪北部の小学校で豚の飼育を通して教育を考え、命を見直そうという実践が行われ話題になった。映画は実話に忠実に作られている。120分の映画を3回に分けて視聴した。

映画のテーマは、次のものである。

小学校の卒業間近、自分たちが世話をして育ててきたブタのPちゃんをどうしたらいいのか？  
下級生に引き継ぎ飼ってもらうのか、食肉センターに送るのか？

子どもたちは、あっという間に映画に引き込まれ、一緒になって悩み考えた。一つ一つの言葉が胸に迫ってきて「自分ならどうするのか？」考えずにはいられない。(映画では、あらかじめセリフが決まっていたわけではなく、子役の子ども他たちにも結果は教えられていなかった。)

映画を見ている最中に、心に残った言葉をメモしていった。

心に残った言葉をメモしましょう。

- ・食べたとしても命を引き継ぐって考えればいいんじゃないかな？
- ・自分たちの仲間なんだからPちゃんを食べることはおかしい。
- ・食べることは殺すことと一緒だよ。生き物と真剣に向き合うことは残酷ですか？
- ・先生、命の長さって、誰が決めるんですか？
- ・魚の身がつまっているのは、がんばって生きてきたから。その頑張りを見捨てるな。

映画を見終わったあとで

あなたがこのクラスだったら、Pちゃんはどうしたらいいと思いますか？

映画と同様〈下級生に引き継いでもらう〉〈食肉センターに送る〉の両方の意見が出されたが、やや〈食肉センターに送る〉が多かった。

◇授業の感想を書きましょう

- ・いつも食べている動物がこうなっていたということを知った。
- ・最後に食肉センターに送られてしまったけれど、命の大切さや生きていくためには、食べることはしかたがないということが分かりました。
- ・とてもよい映画だなあ、と思いました。本とは違う話で二つ見られてよかったです。食肉センターに行ってよかったんじゃないかと思いました。
- ・Pちゃんと別れるのは辛かったと思うけれど、こうなったのはしかたがないから育てた子どもは大変だったし、辛かったと思う。自分も肉を食べるけれど、かわいそうだと思った。命は大切だね。
- ・命の大切さがよく分かりました。この話が本当にあったことだということにびっくりしました。すごい絆ですね。
- ・最後までどうなるかわからなくて、命の重さを改めて感じた。



↑映画

実話→

## ダンゴムシとなかよくなるう

「春のしぜん」では、気温が上がると生きものが活発に活動することを学ぶ。今回はダンゴムシを取り上げた。4月は雨が多く、気温の低い日が多かった。校庭に出てもあまり生きものが見られなかった。

しかし5月になり気温が上がってくると虫の姿も見られるようになってきた。冬の間冬眠していたダンゴムシも起き出したようだ。

そこでルーペを手にしたダンゴムシをさがしに出かけた。

校庭にダンゴムシを見つけに出かけよう。

虫には触れないという子でも、ダンゴムシなら何とか大丈夫だ。見つけたダンゴムシをプラ容器に入れて教室に持ち帰った。ルーペでよく見てクイズに答えていった。クイズ形式にすることで、よく観察をさせた。

ダンゴムシを見つけてわかったこと、思ったこと。

- ・ダンゴムシは足が14本あることがわかった。
- ・ダンゴムシの足を調べたとき、足がちょっと多いと思った。
- ・ダンゴムシは、目も口もあって卵も生むのですごいな。もっとダンゴムシのことを知りたいです。

このようにダンゴムシの足のことについて気づいたり、目や口を見たりした。ルーペでよく見ると、目や口がわかる。ルーペを通してみるダンゴムシは、とても迫力があり、見慣れてくるととてもかわいらしい顔をしている。オスとメスの違いもわかった。

次の時間には、もっとダンゴムシと仲よくなったり、ダンゴムシへの理解を深めてほしいと願った。前回、ダンゴムシレースをしていた子たちが

いたので、そのことを紹介し、4人班ごとレースをした。やってみると個体差があり、足の速い子はいつも一着で、のんびり屋さんはいつも四着である。とってもおもしろい。円の中央で丸くなってしまって、全く動かない子もいる。子どもたちはこんな気づきをした。

- ・私の捕まえたダンゴムシはすぐに丸くなってしまいます。なぜでしょうか？
- ・かわいかった。コロコロやると丸まってしまいます。平気になると元に戻ります。

ダンゴムシの最大の特徴は丸くなることである。そこで

ダンゴムシが丸くなる時はどんなときなのだろうか？

と、いろいろなことをして調べた。ライトを当てる、風を当てる、水をかける、高いところから落とす、線香の火をかけるなどなど…。中には動物虐待？と思われるようなこともあり、ダンゴムシにはかわいそうなことをした。

「卵を持っているお母さんダンゴムシはやめてあげよう」と卵を持っていないかルーペで慎重に見分けた。

さてこうした結果をまとめると、丸くなるときには〈ピンチのとき〉ということが分かった。丸くならないときは〈大丈夫だな〉というときだとまとまった。ピンチのとき(=危険)という表現が、子どもらしくていい。

「実験」と称して、ずいぶんひどいことをしてしまったので

ダンゴムシが喜ぶ(楽しめる)場所を作ってあげよう。

と呼びかけ、それぞれ、思い思いの設計図を書かせた。

- ・観覧車、一度に6匹乗れる。
- ・レース場や滑り台のある遊園地。
- ・滑り台がある。
- ・迷路があって遊べるようになっている。

など、とても楽しそうなものがある一方

- ・土と葉っぱ。
- ・石と葉っぱで作ってあげる。

など、あまり手を加えないものもあった。こうした二つの異なった考えが出たので

ダンゴムシが本当に喜ぶ場所とはどんな場所なんだろう？

とより深く考えてみることにした。

- ・ダンゴムシは自然のものだから、元々いたような場所がいい。
- ・最初と考えが変わって、元いた場所のようなどころの方が、ダンゴムシは喜ぶ。
- ・最初はブランコだったけれど考えを変える。湿った土のところがいい。

このようにもともといた環境の方がよいという意見が大勢を占めた。そうした中

- ・ダンゴムシはピンチのときに丸くなるのだから、敵がいないようにし  
たらいいと思う。
- という考えが出た。この授業中にも、アリに襲われて丸くなったダンゴムシがいた。

〈敵はいない方がいい〉

- ・敵がいると危ないから、敵がいないようにしてあげる。
- ・敵がいなければ、ダンゴムシは安心して暮らせる。

〈敵はいてもいい〉

- ・もしダンゴムシだけを守ってしまったら、今度はアリが困ってしまう。
- ・自然はダンゴムシだけのものじゃない。
- ・もしダンゴムシだけ守ったら、たくさん赤ちゃんを産んで、ダンゴムシだらけになっちゃう。
- ・敵がいてもダンゴムシはそのためになくなるんだから、敵がいてもいい。

最後の天敵がいてもいいか？という議論は、私が予想していなかったものだった。食物連鎖にも

つながる内容である。こんなに深いところまで考え、子どもってすごいな！と感動した。

## ■授業の感想

- ・ダンゴムシがもといいた場所には、最初私は反対していましたが、Tさんの「自然はダンゴムシだけのものじゃない」という意見で、自然は人間や動物にとって大切なものなんだなあ、と思いました。
- ・敵がいないとアリも困るし、ダンゴムシだって敵に襲われなくなったらびっくりするから、自然に近いものを作ってあげたいなあ、と思いました。
- ・ダンゴムシが本当に喜ぶ場所は敵がいない方がいいと思っていただけで、ダンゴムシはそれでも生き延びてきたし、自然はダンゴムシだけのものじゃないから、もといいた場所に返してあげたいなと思った。
- ・ダンゴムシはもといいた場所にいたいと思うけれど、丸まっても食べられてしまうことが分かりました。だからもといない場所に置いても、枯れ 葉や土をおいてあげればいいと思いました。
- ・〈敵がいない〉〈もといいた場所の近く〉の二つに意見が分かれて、私は自然がいいと思いました。なぜかという、ダンゴムシは慣れたところの方がいいと思います。
- ・始めはダンゴムシではなく人間（私たち）が喜ぶ遊園地などを考えていたけれど、ダンゴムシが喜ぶのは今までの生活だと思いました。
- ・敵がいても生き延びてきたのだから、最初の場所が一番いいと思いました。
- ・ぼくはとても楽しく授業ができてよかったです。やっぱり自然もいいかなあと思いました。楽しい授業でした。
- ・ダンゴムシが喜ぶのは〈もといいた場所〉と〈敵がいないところ〉の二つに意見が分かれました。私は自然はダンゴムシだけじゃないから、私は何もしないで帰した方がいいと思いました。
- ・ダンゴムシは土の中にお家があるけれど、遊ぶところを作ってあげようと思ったけど、みんなの意見を聞いていたら、いつもの自然の場所に返してあげようと思いました。



### 割りばしとプラコップでダンゴムシを集める

割りばしとプラコップで、ダンゴムシを集めるのは、子どもへの配慮、生きものへの配慮からである。

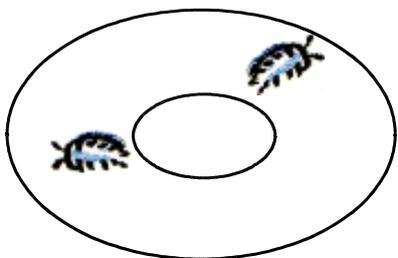
ダンゴムシでさえ、手で触れない子どもが多いが、割りばしを使うことで、抵抗感が減る。また不用意に土の中に手を入れているとムカデなどに噛みつかれることがないように割りばし+プラ容器とした。

また、生きものへの配慮という視点では、ダンゴムシ（土壌生物）の扱いに慣れていないとき、指で強くつまみすぎて、体の一部をつぶさないようにするためである。（上写真）

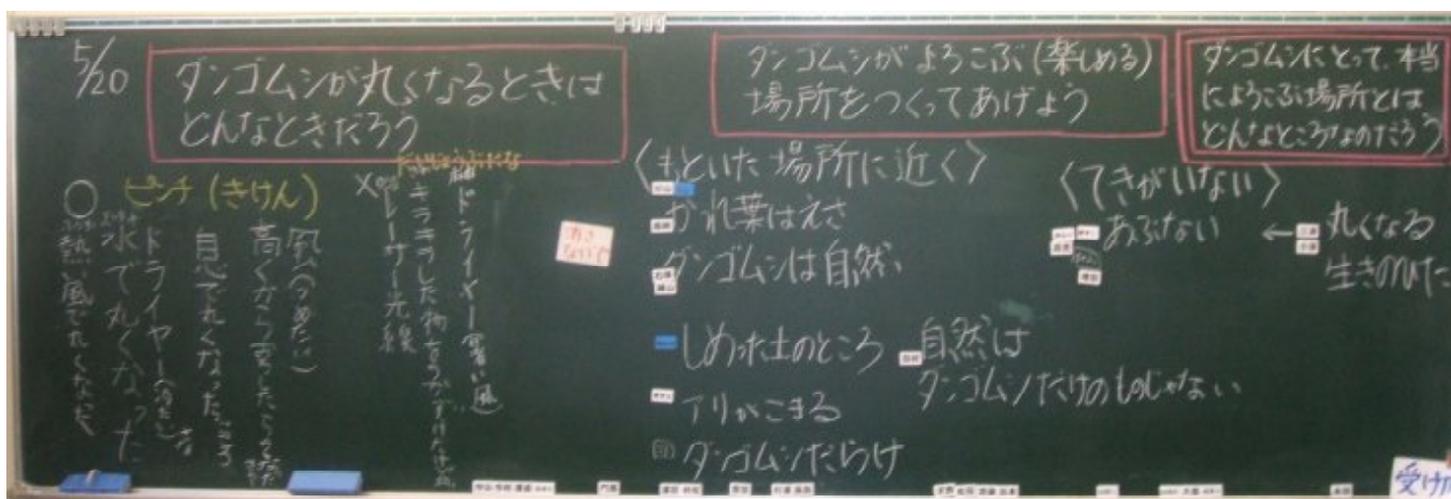
採取後は、ダンゴムシクイズと連動させた。クイズの正解を得るためにルーペで観察させた。（下写真）

### ダンゴムシレース

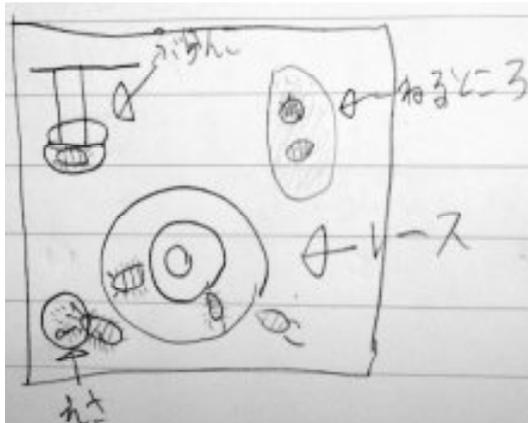
円の中から「よいいドン」で、早く外側の円から出たら勝ち。



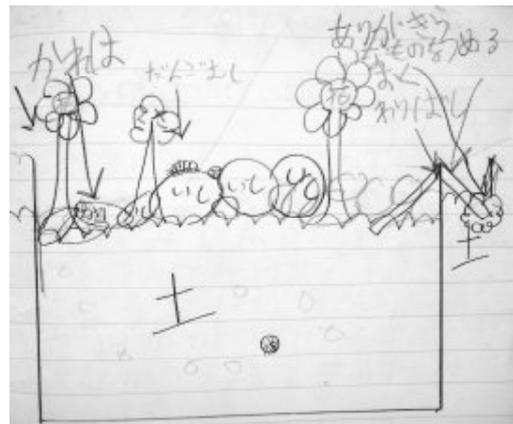
ダンゴムシレース



〈遊び場派〉



〈自然派〉





**花もろ先生 公開授業**

静岡市立長田西小学校 森竹高裕さん(45)

「ダンスのまはり虫の口が描かれた日4のむし半紙。その周りまで糊り糊りをした子どもたちが、取り囲んでいる。真ん中の小さな団に糊り糊りをのせて……」

「ネット・ジャンパー」

森竹先生のおひら虫の口を出したのは、ダンゴムシの半紙だ。

「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。先生は、黒板に書いた「ネット・ジャンパー」のイラストを指さして、「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。先生は、黒板に書いた「ネット・ジャンパー」のイラストを指さして、「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。

「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。先生は、黒板に書いた「ネット・ジャンパー」のイラストを指さして、「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。

「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。先生は、黒板に書いた「ネット・ジャンパー」のイラストを指さして、「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。

「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。先生は、黒板に書いた「ネット・ジャンパー」のイラストを指さして、「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。

## ゲーム交えて生命体感

だれのダンゴムシが、「一番早く大きな団の外に出るか競争」のゲームを始めた。そのゲームは、ダンゴムシの口が描かれた日4のむし半紙。その周りまで糊り糊りをした子どもたちが、取り囲んでいる。真ん中の小さな団に糊り糊りをのせて……

「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。先生は、黒板に書いた「ネット・ジャンパー」のイラストを指さして、「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。

「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。先生は、黒板に書いた「ネット・ジャンパー」のイラストを指さして、「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。

「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。先生は、黒板に書いた「ネット・ジャンパー」のイラストを指さして、「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。

「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。先生は、黒板に書いた「ネット・ジャンパー」のイラストを指さして、「あれ、丸ならならんぞ」と、女の子が驚きの声をあげた。

## アリジゴクはひきょう者か？

昆虫採集に出かけて、子どもたちが一番興味を持ったのはアリジゴクであった。名前はよく知っていても、どんな虫でどんなところにいるのかはほとんど知らない。巣穴にアリを落として獲物にしていることを教えると「そんなの卑怯だ！」という声があがった。そこで、こんなアリジゴクの生き方について考えてみることにした。

まずは「サイエンスチャンネル」というインターネットの番組で、巣の掘り方・アリが落ちてきたら砂を撒いて足を滑らせて穴の下まで落とすこと・体液を吸ったあとはポイツと投げ捨てること・ダンゴムシも餌食にすることなどを知った。こうしたアリジゴクの狩りの仕方を知ったところで

こんなアリジゴクのことをどう思いますか？

- ・セコい
- ・ズルい
- ・悪いヤツ

という印象を持ったようだ。そこで

砂を撒いて虫を巣に落とすアリジゴクは卑怯者だろうか？

卑怯だと考えた子たちがいたので、考えを聞いてみた。

〈アリジゴクはひきょう者〉5人

- ・砂で虫を落として、自分は獲物の体液を吸うだけだから。
- ・砂を撒いて虫を巣に落として食べるなら、昆虫を追いかけて捕まえて食べればいい。砂を撒いて虫を巣に落とすなんて卑怯。

そこで友達と自由に意見交換をした。気がついたことや考えが深まったことについては付せん紙にメモをしていった。こうした意見交換のあと、全員でアリジゴクの生き方について話しあってみた。

〈アリジゴクはひきょう者ではない〉

- ・アリジゴクは虫を食べないと生きられないか

ら。アリやダンゴムシもかわいそうだけれど、アリジゴクも生きたいから卑怯ではない。

- ・アリジゴクは餌（虫）を捕まえないといけない。人間と同じで食べ物がないと困るから。
- ・アリジゴクはこの方法じゃないと虫の液を吸えないから。「じゃあ、虫の液を吸わなければいいじゃん」と言われても、それじゃあアリジゴクがかわいそう。
- ・砂を撒くのも巣を作るのも、自分でやっていて誰の手も借りていないから卑怯ではない。
- ・生き物は何か食べないと死んでしまうし、生き物によっていろいろやり方があるから。
- ・アリジゴクは作戦を立てていたから卑怯ではない。アリジゴクの作戦勝ち。

このような考えが出され、学級全体としては〈ひきょう者ではない〉のではないかということになった。

このあと[NHKデジタル教材]でもう少しくわしくアリジゴクについて理解を深めた。アリジゴクはウスバカゲロウの幼虫だったのである。

- ・餌は一週間に一度くらいしか食べられない。
- ・2年ほどで成虫になるが、餌が取れないと4年ほどかかる。
- ・成虫になったあとの命は短い。

こうしてみるとアリジゴク（ウスバカゲロウ）は、アリジゴクで必死になって生きているのがわかる。

### ◇授業の感想

最初はアリジゴクは卑怯者だと思っていたけれど、アリジゴクの工夫や頭で考えたことなので、これはアリジゴクの作戦勝ちだと思いました。なのでアリジゴクは卑怯者ではないと思います。アリジゴク（ウスバカゲロウ）はとても頭がいいと思います。

ウスバカゲロウは大人になって少ししか生きられなくてかわいそうです。自分でアリジゴクを作っ  
てすごいと思いました。ウスバカゲロウは必死で生きていると思います。

生きるためには卑怯もクソもない。アリジゴクだってがんばって巣を作ってまでこのやり方にしたのだから、卑怯というのはかわいそうだと思う。

## ハゲワシと少女

一枚の写真を使って授業をおこなった。

写真を見て気がついたことを書きましょう。

子どもたちの間を回って、意見に○をつけていった。「○をつけてもらったものを発表しましょう」といって、意見を黒板に書き出した。

- ・なぜ、この子のお母さんは来ないのか？
- ・死んでいるのか、生きているのか？
- ・ハゲワシが少女をねらっている。
- ・腕や足がとても細い（やせている）
- ・アフリカみたいなどころ
- ・少女はもう力尽きていると思う。

そこでこの写真について少し説明を加えた。

「実はこの子は女の子です。首飾りは、お母さんからもらったものなのでしょう。首に巻いています。しかし、いまはそのお母さんもいません。この写真は、アフリカのスーダンというところです。飢餓を訴えた写真として、ピューリツター賞（写真のノーベル賞なみの賞）を受けています。10年越しの内戦、そして干ばつ。日本とかけ離れた現実がここにあります。」

この女の子は、生きているのでしょうか？死んでいるのでしょうか？

予想は半々であった。子どもを狙っている鳥はハゲワシである。ハゲワシは死肉しか食べない。そう、この女の子が死ぬのを今かと待っているのである。

カメラマンは、写真を撮ったあとどうしたと思いますか？

自由に意見を述べてもらった。

- ・ハゲワシを追い払った。
- ・病院へ連れていった。

- ・食べ物をわけてあげた。
- ・別に助けなかった。
- ・かわいそうだな。助けてあげたい。

実は、カメラマンのカーターさんは、写真を撮ったあと鳥を追い払った。しかし、そのあとしばらく声をあげて泣き続けたのだそうだ。「どうして泣いたんだろう？」という声があがったので、みんなで考えることにした。

どうして、カーターさんは泣き続けるしかなかったのですか？

- ・自分もハゲワシが恐くて助けられなかった。
- ・この女の子がかわいそう。
- ・この女の子は死んでしまったと思ったから。
- ・この子だけではなく、ほかにも同じような人がたくさんいるから。
- ・自分も貧しくてごはんをあげられなかった。

この後、少女が置かれた状況やカーターさんへの批難、カーターさんの自殺など一連の事実を話して授業を終えた。

授業後に感想を書かせた。

- ・助けるなら助けるで、ちゃんと助けてあげればよかったと思う。
- ・写真を撮るならその少女を助ければよかったのに。
- ・カーターさんはみんなのことを考えて助けなかったのに、みんなに責められてかわいそう。
- ・すごくかわいそう。どうして国同士仲よくなれないのか。仲よくなれば食べ物だって食べられるし、人間も死なないのに。
- ・私はカーターさんが一生懸命訴えたんだけど、まだ世界でこういう戦争を見て、たくさんの方が死ぬのを見ると悲しくて泣いてしまったと思います。私はこれをカーターさんみたいに悲しく思います。
- ・この写真を見てかわいそうだったし、怖いと思ったし、自分たちだけ贅沢をしている気持ちになった。
- ・カーターさんが助けられないのはわかったけど、それで自殺する必要はないと思った。

Q1 「春のしぜん（ダンゴムシ）」の授業をして、ダンゴムシの見かたや感じ方が変わりましたか？

はい 29人

いいえ 4人

どんなふうに

- ・前まで触れなかったけれど、触れるようになった。(N.S)
- ・前まではダンゴムシが少し苦手でした。でも勉強をしたら好きになれました。(S.F)
- ・前よりダンゴムシがかわいくなった。(N.M)
- ・前はちょっと気持ち悪かったけれど、研究をしたらかわいく見えるようになった。(K.Y)
- ・最初は気持ち悪くて触れなかったけれど、最近かわいいと感じるようになりました。(S.A)
- ・いつもだと恐かったけれど、かわいいと見えました。(M.N)
- ・前、私はダンゴムシがとても嫌いでしたが、勇気を出して触ってみると、好きになりました。(T.K)

Q2 ダンゴムシもふくめて、「生命（いのち）」の見かたや考え方が変わりましたか？

はい 26人

いいえ 7人

どんなふうに

- ・小さいけれどがんばっているな。
- ・他の虫たちの命も大切だと思った。(M.M)
- ・虫も人間も同じように命がある。(I.T)
- ・命は自分たちだけのものじゃない(M.K)
- ・自分がこんなふうにされたらイヤだなあ、と思いました。(M.K)
- ・小さい命でも大切にしたい。(S.T)

Q3 アリがダンゴムシをおそって、食べることについてどう思いますか？

はい（いけないこと） 4人

いいえ（しかたがない） 23人

そのほか 6人

くわしく教えて下さい

- ・他の虫だって、食べていくからしかたがない。(A.S)
- ・だって自然の中じゃ、どちらが勝ってもおかしくない。(S.M)
- ・アリだってダンゴムシと同じで、生きているから。(Y.J)
- ・かわいそう。でもありも食べ物がなくなってしまうから、どっちもどっちだと思う。(S.F)
- ・自然はダンゴムシだけではないし、アリも何も食べなかったら死んでしまう。(K.Y)
- ・どんな虫でも危険が待ち受けているからしょうがない。(M.N)

保護者からの声

社会科見学お疲れ様でした。バツタ取りとっても楽しかったようです。初めてバツタを捕まえられて、とても喜んでいきます。今まで触ることもできなかったので、大きな第一歩です。嬉しいです。